



第250號 (第 22 卷)

(昭和17年) 第 4 號

卷 頭

宇宙を觀る，人生を觀る

隨 筆

天文家の苦勞など

山 本 一 清

去る二月の11日(我が國の紀元節の當日)21時9分(世界時で)に、盟邦イタリアの北部にあるトリノの天文臺員ベルナスコーニ氏は、ベレニセの髪星座の第11番星の北方 $1\frac{1}{2}^\circ$ ぐらゐな所で、かなり明るい光度の一新彗星を發見した。すると、不思議にも、それから僅か3時間ばかり経つた12日0時14分に、こんどは、やはり、我が準同盟國とも言ふべき北歐フィンランドのオテルマ氏が、獅子座の第50番星の東 $\frac{1}{2}^\circ$ ばかりの所に、又一新彗星を發見したといふ。何れも、コペンハーゲンの天文電報中央局から入電があつた。今は、西洋と言はず、東洋と言はず、大戰亂の中にあつて、樞軸側の天文家たちが、活躍をつゞけてゐるのは、實に頼もしい限りである。イタリアは毎日毎夜英國の航空機による爆撃の脅威の下にさらされてゐる。又フィンランドは、ドイツと共に、ソ聯と對戰状態にある國である。そのみならず、フィンランドは、極寒の最中にある。勇敢なドイツの軍隊さへも、寒さのために、今は戦闘を休止してゐる。其の寒さの中で、火の氣一つもない觀測室で活躍してゐる此等の天文家の苦勞のことを思ふと、吾々日本の天文關係者も、奮起せざるを得ない。

自分は、この偶然にも、續けさまに入電した二つの彗星發見のニュースを手にして、尙、いろ々々と考へに耽る。ベルナスコーニ星は7等級の彗星であるし、オテルマ星は15等級の彗星である。この光度の模様から考へると、オテルマ星は、とても、眼視觀測による收獲ではなくて、必然、寫眞觀測によるものであろう。之れに反して、ベルナスコーニ星の方は、小さい望遠鏡でも容易に見える程度の明るさの星であるから、多分、これは眼視觀測の賜ものであろうかと、一應は、誰でも考へる。しかしながら、星座の關係から考へると、このベルナスコーニ星も亦、決して普通の彗星搜索機の力によつて、眼視的に見つけ

出されたものではあるまい。誰でもよく知つてゐる如く、二月の中頃は、太陽が山羊座から水瓶座あたりにあるのだから、彗星搜索者が目がける天空は、日没後ならば、ペガソス座か、魚座か、鯨座あたり、又、日出前ならば、蛇座から蝸座あたりの筈であつて、決して、獅子座や頭髮座ではない。こうした事情から考へると、オテルマ氏もベルナスコーニ氏も、共に、之れは、小遊星を寫眞機で觀測中に彗星發見をしたものと思はれる。小遊星ならば、いつも大體太陽の正反對の側に於いて、對衝の頃に密集してゐるのを觀測するのが普通であるから、二月には獅子座あたり（又は、對衝以前を狙ふならば、頭髮座あたりを觀測するのが普通だから）尙、イタリヤのトリノ天文臺もフィンランドのトルク天文臺も、小遊星の觀測を日程のプログラムとして活躍してゐる有名な天文臺なのだから、上の想像は、ほど當つてゐることだろうと思ふ。若し此の想像が當つてゐるとすると、オテルマ、ベルナスコーニ兩氏の、彗星發見以外の、平常の勞苦といふものを、吾々は非常に大きく買はなければならぬ氣がする。眼視觀測に比して、寒い戶外に於ける長時間の天體寫眞撮影といふことは、實際の經驗ある者でなければ、その本當の勞苦は、わからない！ 殊に、北緯60°以上のフィンランドの冬空では、鬚も眉も、鼻も、唇も、何もかも凍つて了う寒さである。此うした戶外で、1時間も2時間も、案内望遠鏡にしがみ付いてゐる忍苦を考へて見ると、吾々、まだ々々忍び得る日本の土地で、安易な天體觀察にのみ暇をつぶしてはゐられないと思ふ。同じ日本人でも、陸海の將士は、極暑の南洋や、極寒の北地で、命の取りあひをやつてゐるのである。吾々邦國に於いて、國家の一員たるものが、暖房室内に於いて、只の天文談議に耽つてゐては、誠に良心にすまない。

二月下旬、久しぶりに太陽面に大黒點が現はれた。昨年九月中旬以來のことである。津留氏からは電報や通信を受けた。吾々も此の黒點の行衛を注意深く見守つてゐる。此の頃は、大體に於いて、黒點の減少しつつある時機である。しかしながら、黒點の如き不規則な現象は、減少の時代にも、時々は驚くべき大黒點が姿を見せることがあるから、油斷ならない。黒點は、我が地球に何等かの影響を及ぼすことが多いから、此の意味に於いて、觀測者相互の連絡が望ましい。地球に、オーロラや、磁氣嵐や、有線無線の電信や電話の妨害を起す黒點は、(1) 太陽像の中心5°以内を通過することと、(2) 其れが生成しつつある黒點であることが、必要條件である。この二點について、平常の注意と、迅速なる急報が望ましい。(終)